

# 飛鳥から、柿本人麻呂と山部赤人の歌々を読む

奈良大学 教授

上野 誠

古典を読むということは、それはそのまま古典の時代に思いを馳せるということでもあるから、そこには常にノスタルジックな心情が潜むことになる。いわゆる「懐古趣味」である。例えば、アルバムで自分が写った写真を見るとき。おそらく、アルバムを開こうとする時点で、すでに懐古、旧懐の情というものがあるはずだ。なぜ埃を被ったアルバムをわざわざ開くかといえは、その行動の奥には、いささかの時、懐古の情に浸りたいという思いがあるからだ。つまり、古典を読みたい、読もうという思いの中に、懐古の情がすでに潜んでいるのである。すると、写真はいきなり美化された景として鑑賞されることとなる。

じつは、そういう懐古、旧懐の情による

美化は、今にはじまったわけではない。平城京遷都後の明日香の地は、すでに懐古、旧懐の対象として歌われているのである。それは、本号に収載された奈良公俊「山部赤人神岳歌制作年次小見」論考を見れば明らかだ。山もよい、川もよい、春もよい、秋もよい、朝もよい、夕もよいと歌われた景色は、赤人の心の中にしかないものである。奈良公俊は、その制作年次を注意深く推考している。そして、山部赤人が、このような美化された景を歌うにあたった歴史的契機のようなものを掘り出している。つまり、平城京に住む人びとにとっては、明日香は懐かしき故郷となっていたのである。すでに、奈良時代には。

平城遷都から二十一年経った天平三年

(七三二)に、大伴旅人は、次のような歌を歌った。

三年辛未、大納言大伴卿、寧楽の家に在りて故郷を思ふ歌二首

しましくも 行きて見てしか 神名備の淵は浅せにて 瀬にかなるらむ

(卷六の九六九)

「第二首省略」

旅人が平城京の家から追懐した故郷の景の一つは、「神名備の淵」であった。この歌から読み取ることができるよう、平城京生活者にとって明日香のカムナビは、忘れることのできない「故郷の景」であったのだ。このように、明日香のカムナビをもつ

て、故郷の景の代表とする考え方は、旅人の個人的感情に由来するものではない。『万葉集』においては、単に「故郷」とのみ記されている場合、前掲の旅人歌の題詞にみられるように、明日香を指している場合が多いのである。同じく故郷に思いを馳せる歌としては、巻七の雑歌に次のような歌も伝わっている。

故郷を思ふ

清き瀬に 千鳥妻よび 山の中に 霞

立つらむ 甘南備の里

年月も いまだ経なくに 明日香川

瀬瀬ゆ渡しし 石橋もなし

(巻七の二二二五、一一二六)

「故郷を思ふ」の下に分類された二首のうち、第一首目は明日香のカムナビの景を詠んだ歌とみるべきであり、二首目が明日香川の景を詠んだ歌であることは、重要である。すなわち、故郷といえは明日香が連想され、故郷・明日香の景はカムナビと明日香川によって代表されるといった類想が、その背景にあるものと思われる。おそ

らく、このような意識は、『万葉集』巻七の編纂者の意識であるとともに、平城京の生活者となった貴族・律令官人に共通する意識であったのだろう。明日香・藤原の生活者にとって信仰的、精神的紐帯であった明日香のカムナビが、平城京の生活者にとっては故郷追懐の景として想起される場所になっているのである。

つまり、赤人にとっての明日香とは、懐かしき故郷であったのである。私がこういうことを縷々述べたのは、ほかでもない。

▼村田右富美「皇太子の死を嘆く―柿本人麻呂の日並皇子挽歌―」

▼朴喜淑「舍人慟傷歌群―島の宮はも―」

▼高松寿夫「明日香皇女挽歌―明日香川のほとりで亡き皇女を哀悼する―」

▼鈴木喬「歌と木簡―飛鳥・藤原出土の木簡から―」

の論文を読むにあたっては、懐古と旧懐の情を捨て去って読んでほしいからである。これらの論文を読む時は、東京の超高層ビル群を頭に思い浮かべ、ビルの谷間を意気揚揚と闊歩する人びとの群像をイメージしてほしいのである。柿本人麻呂は、その都

で死んだ皇子と皇女の死を悼んでいるのである。

そして、それらの歌々は、柿本人麻呂が自ら持っている文字や言語に対する知識を余すところなく使って書き上げたものである。現存する『万葉集』が、柿本人麻呂の文字遣いをそのまま残しているかどうかという点については、不明というほかはないのだが、われわれは、木簡資料によって人麻呂の生きた明日香の時代の人びとの文字使用のありようを、ある程度垣間見ることができる。もちろん、その場合、紙ではなく木簡に書く場合という限定つきであるのだが。鈴木喬の論文は、木簡に歌を記するという行為を問おうとする論考である。

考古学や歴史学の特集に比べ、地味でもあり、歌の読解には忍耐を要するかもしれないけれど、歌について学ぶということのはじまりは、その歌の読解からしかはじまらない。はじめは少し退屈かもしれないが、この特集号には、万葉研究の最前線に立つ研究者の英知が詰まっている。ために、味読を乞う！ 特集号編集にあたり、いささかの口上を申し述べる次第である。